
記憶

望月愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

記憶

【Nコード】

N4478D

【作者名】

望月愛

【あらすじ】

大学1年のサキは元カレのユータが忘れられない。周りからは『早く忘れる』って言われるし、復縁の可能性は0%…。そんな中出会ったサトシにサキは惹かれていく。しかしユータが…！？

1 別れても好きな人（前書き）

物語の始めは微妙かもしれませんが、とにかく読み進めてください。
絶対に後悔はさせません。

稚拙な文章ですが読んで頂けたら嬉しいです。
随時更新中です。

1 別れても好きな人

——出会いの数だけ別れは増える——

最近の私の頭にはこのフレーズばかり流れている。

「サキ、医学部との合コン行こうよ。」

静かな図書館にナチの音が響く。

2コマ目の空き時間、私、中原咲季と間宮那智は次の授業提出のレポートをやっている。…が全く進まない。

私はパソコンを打つ手を止め、伸びをしつつ答えた。

「だから行かないってば。合コンとか何か嫌だし。」

「もうすぐ夏休みだよ？彼氏作ろうよー！オトコが居ない夏ってすごく虚しいんだよ！？高校三年間彼氏居たサキには分かんないだろうけど」。しかも大学の夏休みは二ヶ月もあるし。」

「私、まだ彼氏作る気になんないから別に良いよ。」

「まだ言ってるの！？ユータと別れてから一年近く経ったのに。」

「まだ10ヶ月！どんだけ時間が経ったって忘れられないんだからしょうがないじゃん。」

私とナチは四月にK大学経済学部に入っただけの一年生。
ナチとは進学校として有名なF高校で同じクラスになり仲良くなっ
た。

同じ大学、同じ学科になって更に仲良くなったかも。

そして、高校のクラスには私が高校時代ずっと付き合っていた彼氏、
中野裕太も居た。

ユータは出席番号が前後で、はじめの席が隣だったからすぐに仲良
くなった。

ユータは元気いっぱいのお調子者。でも部活でサッカーをする姿は
真剣ですごくかっこ良かった。

それを見た瞬間、好きになってた。

そしたらなんとユータから告白され付き合う事になった。高一のち
ようど今頃…梅雨入り前の夕日がキレイだった日…。

大したケンカもなく毎日が幸せで、ずっと一緒に居ると思っていた
のに…高校最後の夏休みの…最後の日に振られた。

ユータは『彼女として見えなくなった』と言った。

いきなりすぎてその言葉の意味が全くわからなかった。

正直、今でも分からない。

だから何回も『やり直そ。』って言ったのに毎回無視された。

そして、卒業式の日以来、一度も会ってないし、連絡も取っていない。

でも忘れられないのだ。。。

「サキ、何回も何回も言ってるけど、ユータの事はもう忘れなさい！あんなに冷たくされたのに何でまだ好きなの！？」

「…自分でもそう思う。けど好きなんだから仕方ないよ。」

『別れてからはかなり冷たくされたけど、それ以前のユータは優しくって、一緒に居られるだけでかなり幸せだったんだよ。それが忘れられないの…』

そう思ったけど口には出さなかった。

ナチはため息をし、『仕方ないな』って感じで話し出した。

「その『好き』はもう妄想の世界の『好き』になってるって。今ユータがどんな生活してるかも知らないでしょ？前とは変わっちゃってるかもしれないよ。」

「……」

その通りすぎて何も言い返せ無かった。

「だから合コン行こ！アユミと2人で行くつもりだったのに向こうが急に3対3にしてって言うてきてさー困ってるの。」

「何それっ？色々言ったくせに結局は人数集めって事！？そんなのぜったい行かないから！」

「やっぱりダメかぁー。明日なのに…どうしょー！」

ナチが叫んだため周りから冷たい視線が飛んできた。申し訳なくて何回も頭を下げた。

「でもねサキ、本当にユータの事はもう諦めなよ。ぜったいにもっと良い人は要るから。サキは可愛いし時間がもつたいないよ。てかユータの事だし、大学でもう彼女居るんじゃない？」

「……。」

充分あり得る…。

2 限終了のチャイムが鳴った。

結局レポートは間に合いそうにない。。。

2 片付け

「はぁー。」

帰りの電車の中、思わずため息をついてしまった。
向かいに立つ人の視線を感じる。。。

レポートは授業中になんとか終わらせて提出してきた。ま、評価は期待してないけどね…。

『いい加減忘れなきゃなあ…。』

周りに言われなくなっただって毎日のように思ってる。

なのになんで忘れられないんだろう…。

学校から家まで1時間掛かるのにユータの事を考えてたらあつという間に家に着いた。

「ただいまー。」

「ちょっとサキ！部屋片付けてよ！」

私が帰るなり、3歳年上の姉 真衣子が怒り口調で言ってきた。

「あれっ！？なんで居るの？」

お姉ちゃんは今、新潟で一人暮らしをして教育大に通っている…はずなのに。

「言っておいたでしょ？6月の後半から教育実習があるから1ヶ月実家に戻るって。」

「そーいえば。」

「だから部屋片付けておけって言ったわよね？なんであんなに汚いの！？」

「すっかり忘れてて…。」

私の家は一軒家だけど部屋数が無いから、お姉ちゃんと2人部屋なのだ。

まあここ数年は私だけの部屋になってるんだけど…。

「ごめん。すぐ片付けるから！」

急いで自分の部屋へ向かった。

昔からお姉ちゃんはちょっと怖い…。こんな風に怒ってたら従うしかないのだ。

これが妹の弱いところ…。

「サキ、、、この汚さは私が帰って来たからっていう以前の問題だよ?。」

そう言うお姉ちゃんは信じられないって顔をしてる。

床に散らかる服にマンガにゴミもろもろ…。

そう、私は俗に言う『片付けられない女』なのだ。

「さすがO型だね。私も片付けるの手伝うから早く終わらせよ。」

そう言うってお姉ちゃんは散らばるゴミを拾いはじめた。

「はい、ごめんなさい。」

私もがむしゃらにゴミを拾った。

「アンタ、何でまだ高校の教科書が床に落ちてんの!？」

「あははー何でだろうね、ゝゝ。」

苦笑いをする。

「どうせもう使わないんだから捨てなさい。ほら、ビニール紐持ってきて。」

「はい。」

今は従うしかない。紐を取りにリビングへ向かった。

『部屋をキレイに保たなきゃなあ。』

そう思うけど出来ない。

…私、いつも思うだけで何も出来て無いじゃん…。

テンションが更に下がる。

「そつえばユータ君と別れたの？」

部屋に戻るとお姉ちゃんがいきなり聞いてきた。

その手にはユータと撮ったプリクラが握られている。

「えっ？てか…別れてもう1年近いよ。知らなかったっけ？」

「聞いてないよー。何で別れたの？」

「古い傷をえぐらないでよ。」

「って事は振られたんだー。ユータ君に好きな子が出来たからでしょ？」

「違うよ。何でそう決めつけるのー？」

「今日ユータ君と知らない女の子が一緒に居るのを駅で見かけたの。」

「!？」

言葉が出なかった。

『ユータの事だし、大学でもう彼女居るんじゃない？』

ナチの言葉が鮮明に蘇る。

「手、繋いでたし新しい彼女だろうねー。ま、あの顔ならモテるだろうし当たり前か。」

「そーなんだ…。」

「あれっ？もしかしてショック受けてるー？」

ニヤニヤしながら聞いてくる。

「知らなかったから驚いただけ！ユータなんてもうどーでも良いし。」

まだ引きずってるなんて言えない。

「サキも新しい彼氏作りなよー。」

「ちょっと、何で居ないって決めつけるの？」

ま、居ないけどね。なんとなくムカつく…。

「そんな事言うならこの写真しまいなさい。このぬいぐるみも。」

姉の目線の先にはツーショットの写真とデイズニーに行った時貰ったミッキーのぬいぐるみがあった。

「おっしやる通りです…。」

「この際だからこの部屋全て片付けちゃいなよ。こんな部屋じゃ新しい恋もやって来ないわよ。」

お姉ちゃんの名言。。。

色んな意味で心に染みた…。

6時から始めた片付けはご飯前には終わる訳もなく、結局日付が変わる直前まで続いた。

部屋はだいぶキレイになった。
キレイにし過ぎたからか、ユータに関する物を片づけたからか、私はこの部屋に寂しさを覚えた。

3 心の変化

「やばっ。寝坊した!!」

時計の針は7:20を指している。

「あ、起きた? アンタの目覚ましうるさかったから止めたよ!」

そう言うお姉ちゃんは既にスーツに着替え化粧をしていた。

「起こしてよー。今日1限からなのに!」

1限は8:40から。あと20分で家を出ないと間に合わない。

「何回も起こしたって! 友達に代返して貰えば?」

「この先生は出席厳しいの。」

「諦めて2限から行けば!」

薄目になってマスカラを塗るお姉ちゃんに何故かムカついた。

こんな人が教師になって良いんだろうか?

時計とにらめっこする。

「間に合う!」

そう言つて急いで着替え、メイクもせず慌てて家を出た。

起きてから15分後、奇跡的に駅に着いた。時計を見る。なんとか間に合いそうな時間だ。走つて来たから汗が出る。

ホームに行くといつもよりたくさんの方が居た。

『この時間は混むのなかあ？』

息を落ち着かせつつ乗り換えしやすい5両面へ向かう。

すると構内アナウンスが流れた。

『只今、東横線祐天寺駅で人身事故が起きた為、上下線共に運転を見合わせております…』

足が止まる。

せつかく走つてきたのにー！

意味ないじゃん！！

とりあえず5両目へ行こうと歩き出した。

「イタッ。」

「あつすみません！！」

急に動いたから女の人の足を踏んでしまった。

「大丈夫？」

聞き慣れた低い声が聞こえる。

はっと顔を上げた。

「ユータ…」

私が足を踏んだ人の隣にユータが立っていた。

「サキ？」

ユータは驚きを隠せない様子だった。

訳が分からない女の人は私を見た後ユータを見つめていた。

「あ…久しぶりじゃん。」

無言が気まずくてとりあえず喋った。

「ホントだな。元気？」

「元気だよー。」

ふと昨日のお姉ちゃんの言葉を思い出す。

「…彼女？」

彼女を見つつ、超ストレートに聞いてしまった。

「そう。同じ大学のユカリ。」

ユカリさんは恥ずかしそうにぺこつと頭を下げた。

この人…私とは正反対だ。大人っぽい。てかお嬢様っぽい。

「こっちは中原さん。高校のクラスメイト。」

『中原さん』なんて呼んだ事も無いくせに。

まあ、元カノとは言わないよなあ…。

つて、とりあえず謝らなきゃ。

「足踏んじゃってごめんなさい。」

「いえ、私こそ。ボケつとしてたから…。」

無言になる。

気まずい。

「私乗り換えあるから向ここの車両行くな。」

「ああ。あ、そうそう、谷原が夏休みにクラス会やるって言うってた。また連絡行くと思うから。」

「わかったー。」

そう言つて振り返り人混みの中を歩き出した。

「ユカリ、危ないから俺に掴まってて。」

遠ざかる中、かすかに聞こえたユータの声。

もう私には向けられない優しさ…。

彼女、ユータの家に遊び行つたんだろうなあ。ユータのお母さんめ
つちや優しくて良い人だから、すぐ仲良くなるんだろうなあ。
「いつも『サキちゃん』って可愛がってくれたな…。」

分かつていたはずなのに苦しい。
涙が溢れるのをガマンしてる。

なんで…なんでまだ好きなんだろう？私だつて次の恋したいよ。

『新しく好きな人出来たらユータなんかすぐ忘れるって。』

ナチに何回も言われたコトバ。

さっきの幸せそうなユータを思い出す。

こっちはこんなに悩んでるのに楽しそうにしゃがって！

なんかだんだんムカついてきた。

よし、私も好きな人作ってやる。ユータよりめっちゃ良い男捕まえてやる！

悲しみが怒りに変わったのか、自然とそう思えた。

でも…

恋ってどうやってするんだっけ…。

「ナチ、やっぱり私も合コン行く！」

ナチに会った瞬間、おはようも言わずそう言った。

「えっ？遅刻してきていきなり何言ってるの？」

結局学校に着いたのは1限が終わる頃だった。普段でさえ満員すぎる電車がそれ以上だったから授業は諦め、空いてから来た。

「今更合コン行ってくって言われてもムリ。もうカヨに頼んじやったよ。」

「うそお。お願い！私も入れて！！」

「急にどうしたの！？何かあった？」

「それは…」

「わかった。ゆっくり聞くからとりあえずどっか行こ。」

今日は1限と3、4限の日。3時間近く空くから近くのファミレスに行く事にした。

「で？何があつたの？」

注文を言った後すぐナチは問いかけた。

「今朝ユータに会った。」

「まじ？」

「隣に彼女居た。」

ナチは目を広げて驚いた。言葉が出ないっぽい。

私は今朝の詳細と昨日のお姉ちゃんとの会話を全部ナチに話した。

「つまり…新しい恋をする気になったんだ？」

「うん。でもどうやって好きな人作るか忘れちゃって…同じ学科の男の子と一緒に居て楽しいけどときめかないしさー。」

「だから合コンかぁ。」

「そゆこと。」

「昨日まで合コンキライとか言ってたくせに。」

「今は手段選んでる場合じゃないの！一日でも早く彼氏が欲しいんだって。」

「人は一日で変わるもんだねえー。でもサキがそう考えれるように

なつたのは嬉しいよ。」

そう言ったナチは笑顔だった。

「で…合コン参加はムリ？」

「んーサキがそこまで言うなら相手をお願いしてみるよ。どうなるか分からんけど。」

「ありがとう！いざとなったら3：4でも良いから！」

「アンタがよくても周りが良くないから！」

…間違いない…。

ナチはメールを打ち始めた。

その間に注文したハンバーグランチ（ライス大盛り）が私の前に置かれた。

「サキ昼からよく食べるねー。」

ナチはケータイを打つ手を止め、大盛りなご飯を見た。

「今日朝ご飯食べて無くてさー。朝昼ご飯だから」

「サキってよく食べるのに太んないよねー。うらやましい。」

「食べて動く！これ基本」

「ウソつけ。運動してないクセに。」

「バレた？でも運動したいなー。今更だけどサークル入らない？」

「何よー通学に時間掛かるから入りたく無いって言ったくせに。」

「でもサークルって『大学』って感じるじゃんー。」

「あつ、返事来た。」

話を遮ってナチが言った。

「早いねー。」

メールが早い男の人ってなんか負けた気がするのって私だけかなあ？

「『全然大丈夫 こっちも一人足すから。』だって。」

「まじ！？ありがとうー。」

「…てかサキ…？」

「んん？」

大口でハンバーグを入れた瞬間ナチが言った。

「アンタスツピン&その服で行くつもり？」

「んー！？」

急いでハンバーグを飲み込んだ。

「そうだった。今日寝坊したから慌てて来たんだよ。メイク道具は持ってるけど…」

今の服装…いわゆる…Ｔシャツ＆ジーンズ、…。

「メイクは良いとしてもさすがにそのカッコは無いよ。」

「ああ！つて事はこのカッコでユータに会っちゃったんだあ。やばい。」

「サキー。もう忘れるんじゃないのー？」

「あ…ついクセで、…それよりどうしよう？」

「家戻る時間は無いよー。６時に待ち合わせだから。もうそれで良いんじゃない？いちおセシルのＴシャツにジーンズだからオシャレつちやオシャレだよ。」

「ナチ投げやりでしょー！」

「ホントに思ってるって。それより早く食べて化粧した方が良いつて。」

人生初の合コン。どうなる事やら…。

4 合コン

「どうも。」

夕方6時の渋谷。ナチ、アユミ、カヨ、そして私の元に3人の男が近づいてきた。

「ナチ、可愛い子連れてきたじゃん。」

3人のうちの一人がナチと親しく話している。

「ちゃんとしんちゃんの好みを連れてきたからー。」

ナチが返す。

「こんばんは。俺医学部2年の泉慎太郎です。ナチのイトコ。よろしくね。」

ノリの良い慎太郎が言つと女の子みんな（ナチ以外）驚きでばかーんとしていた。

「イトコなの？」

ナチに聞いてみた。

「言つて無かつたっけ？ま、とりあえず店行こーよ。」

「そうだな。すぐ近くだから。」

私たちは店へ向かった。

「じゃ、ベタだけど自己紹介からー。」

乾杯後慎太郎が言うと私以外の子がみんな拍手したり声をあげた。

みんな合コン慣れしてんのかなあ…。

「さっきも言っただけど、医学部2年の慎太郎です。シンとかしんちゃんって呼んじゃってください。」

しんちゃんとは茶髪のちよつと長めの髪。そこまでチャラいわけじゃないけど医学部って感じは全くしないなあ…。とにかく明るい。盛り上げ役なんだろうな！。

「俺は清永卓也です。フツーにタクヤって呼んでください。」

タクヤは黒髪短髪で…さわやかで…芸能人で言うとEXILEのタカヒロみたい。

つまり…めっちゃタイプな顔だあ！

てかこんなカッコ良い人に彼女居ないのおかしいよ！？

一気にテンションが上がってきた。

「池上准です。ジュンって呼んでください。」

ジュンは…芸能人で言うと瑛太かな？背が高くて優しい顔してる。

ってかみんなカッコ良い！

昨日までの自分がウソのように次に進もうとしている。

「あつ、そう。もう一人来るんだけど、急に誘ったからちょっと遅くなるんだ。ごめんねえ。」

しんちゃんが言った。

「すみません。急に行きたいって言うて。」

急に申し訳なくなつて反射的に言葉が出た。

「あ、サキちゃん？ナチから聞いたよ。俺、サキちゃん応援するから！」

「えっ？」

ナチは知らんぷりしてる。

タクヤとジュンが『何の話？』ってしんちゃんに聞いている。

「あと、敬語禁止。ねっ。じゃあ女の子も自己紹介お願いしますーす。」

するとナチから喋り始めた。

てか、みんな服装が可愛い。アンサンブルにシフォンスカート…。気合い入ってるなあ。

Tシャツジーンパンの自分が恥ずかしくなる。

ナチが喋り終わると歓声が飛んできた。

やばい。この空気についていけない…。

さっき上がったテンションは店に着いた時より下がってしまった…。

結局私は名前くらいしかしゃべれなかった。

これが合コンのノリなんだろうなあ…。やばい、なじめる気がしない。てか私人見知り激しいんだった！

ってかなり今更だよなあ…。

「ちょっとおー。何でお酒飲んでないのー？」

ウーロン茶を飲んだ私の元にしんちゃんがやって来た。元から陽気な性格だけど、多分すでに酔っ払ってる。

実は…私あんまりお酒が得意じゃない。2杯くらいでポーとしてしまうのだ。

「実はお酒苦手で…。」

「じゃあカシオレで良い？すみませーん！カシオレ1つー」

しんちゃん私を無視して勝手に頼んでるし…

「サキちゃん楽しくないの？」

「えっ？そんな事無いですよ？」

「全然話に入って来ないじゃんーもつと話そうよー。」

「初めての合コンなんでどうすれば良いか分からなくて。年上の男の人って今まで関わりが無かったし…。」

「年上なんてカンケーないから。たった1コだし。改まらなくて良いよ。ね、タメだと思って。」

「カシスオレンジです。」

店員さんがカシオレをしんちゃんに渡した。しんちゃんはそれを私に差し出す。

ここで受けとらなかつたらさすがにKYだから
「ありがとう」と言っただけだ。

「じゃあカンパニー！」

しんちゃんと2人で乾杯した。

「サキちゃんは元彼とどれくらい付き合ってたの？」

「ん、2年ちょっとです。」

「高校で2年は結構長いね。オレ何て今まで1年続いた事無いよ。」

「ホントに!？」

今までも色んな人に『付き合っつて長いねー』って言われてきたけど、私からしたら1年経たない方がすごいと思ってしまう…。

「オレ浮気症だからいっつもバレて振られるんだ。」

だからカッコイイのに彼女居ないんだ…。

「そんな事合コンで言ったらモテないよー」

「やべ。聞かなかった事にしてー。」

「どおしよっかなー。」

なんだかしんちゃんは話やすくて楽しい。

「何かさっきまでとキャラがちがくない？まさかもう酔った??」

「私飲むとすぐポケーってなっちゃうんだあ。でも意識あるから大丈夫!ー!」

「その位のが楽しいよ。」

しんちゃんはそう言った。

しんちゃんはなんだか私に元気をくれる。こういう人と付き合ったら楽しいだろうなー…。
ふと思った。

途中で4人目の男の子、松岡ナントカって人が入ってきた。

けど…あんまし覚えてない…。

「サキ！起きてよー。」

ナチの聲がかすかに聞こえた。目を開ける。

「あれっ？私寝てた？」

どうやら寝てたらしい…。恥ずかしすぎる！！

「これからカラオケ行くって。サキどうする？」

「ナチは？行くの？」

「行くよー。サキが行くなら。」

時計を見る。まだ9時前だ。

「じゃあ行くー。」

という事でカラオケに行く事になった。

夜になっても渋谷は人が多い。イチバン近くのカラオケに行くとすぐに店に入れた。

「あれ？カヨが居ない。」

部屋に入ってみるとカヨがいなかった。

「サキちゃん今気付いたの？」

タクヤが言う。

「カヨはしんちゃんとお先したよー。」

ナチが言う。そういえばしんちゃんも居ない。

「うわー合コンって感じだねー。」

思わず本音を言ったらみんな笑ってた。

てかしんちゃん…この中でイチバン良いって思ってたのに…。
寝てた事を後悔する。。。

だいぶ酔いも醒めたから、さっきの反省を生かしてピーチサワーを
ちびちび飲む事にした。

それでも飲むんかい！？って感じだよね…。
すぐ酔うけどお酒は好きなんだ。

カラオケの間はジュンともタクヤとも結構話した。2人とも話して
ると楽しい。

でも、後から来た人…（名前覚えて無い）とは一言も話さなかった。
てか、あの人女の子誰とも話してないし、歌ってもないし…。
何しに来たんだろうか？

程よく酔っ払ってるし、意外と楽しいからか、時間はあっという間

で終了10分前の電話が来た。

「サキちゃん、ちょっと外行かない？」

ナチとアユミが熱唱してる時タクヤに呼ばれた。

胸がドキっとする。

平然を装って部屋を出た。

「あのさあ、お願いがあるんだけど…。」

「何？」

「なんだかドキドキしてくる。これって『一緒に抜けないー？』とか
そついう系？」

「俺、ナチちゃんが気にいっちゃったんだよね。」

「えっ？」

「それでこの後2人で出掛けないって誘ったら『サキが心配だから
一緒に帰る』って言うててさあ」

さっきまでの淡い期待は速攻で打ち崩された。

「はあ…。私もう大丈夫だよ。気にしないでナチ連れてっちゃって
」

「ホント？ありがとう！サキちゃん東横線だろ？サトシもそうだからアイツに送らせるから。」

サトシ…？ああ、遅れて来た人か。

「送ってもらわなくても大丈夫だよ！」

「氣遣うなっ〜。」

いやいや、氣を遣ってるわけじゃなくて、一言も話して無いから氣まずいんですよ…。

「それに一人で帰るなんて言ったらナチちゃん心配するでしょ？」

…結局はナチですか…。

ま、友達の幸せを祝えない程心の狭いコじゃないから協力しよう。

「わかったよ。頑張ってね♪」

「おお！サトシに話しておくから。」

そう言って部屋に戻った。

なんか今日の私空回ってばっかじゃん…。
合コンを甘くみてたかなあ。

「サキーもう時間だから帰る準備して！」

ナチがマイクや本を整理しつつ言った。

「分かったー。」

ふと机の上を見ると飲みかけのピーチサワーがあった。氷が溶けちゃってるけど、まだコップの半分くらいある。

『もったいないから飲んじゃお。』

私はピーチサワーを一気に飲んだ。

これを後で後悔する事になるのは…言うまでもないか…。

5 きっかけ

「じゃあ今日はこれで」

カラオケ店の前でタクヤが言う。

すんなりと3組の男女はそれぞれの方向へ向かった。

???3組?アユミとジュンもカップル成立してましたー。

ってそれよりやっぱ気まずいんですけど…。無言が続く。

「東横線でしょ?何駅?」

サトシって人がやっと喋った。めっちゃ無愛想だけど。

「私は菊名だよ。えっと、アナタは?」

「俺は祐天寺。だから各停乗りたいんだけど菊名なら急行が良いよね?」

「あつ、じゃあ私急行で帰るんで…。」

これで気まずい時間が短くなる。

「そう。」

ホント無愛想だなあ。

「何で今日何も喋ってなかったんですか？合コンなのにー。」

なんか足元がフラフラしてきた。

「急に呼ばれたからだよ。第一合コンなんて聞いて無かったし。」

「そうなのー？じゃあ私のせいだー。」

「アンタなの？急に増えたヤツつて。」

「そーだよー。なのに誰からも誘われないし、アドさえ聞かれ無かったー。私オンナの魅力ゼロー。」

「ちょっと、駅で叫ばないでよ…。」

はい、私の記憶にあるのはここまで…。

目を開けると真っ白な天井が視界に入る。

「えっ？どこ？」

ベッドから上半身を起こすとサトシって人が床に座ってた。

「やっと起きた？アンタ記憶ある？」

「えっと、多分ないかな…てかどこどこ？」

状況が全く分からない。

「ここは俺んち。アンタ駅のホームで寝ちゃったんだよ。何回起こしてもちゃんと起きないし、タクヤ達に電話しても繋がらなくて。アンタが起きるまで待ってただけで終電来ちゃったからとりあえず家帰ってきた。」

「あ…色々すみません。」

「始めに言っておくけどやましい気持ちじゃないから。むしろ大声出されたりして困ったし。」

「もちろん分かってます。」

「もう電車ないし、アンタが良かったら朝まで寝てきな。」

「ホントごめんなさい。…アナタは一人暮らしなの？」

部屋は白と茶色を基調として、モダンで大人っぽい感じ。

「ああ。」

「へえーえっ!？」

床の端っこの方に…ぶ…ブラジャーが落ちてる。しかも見覚えのある…。

はっと自分の胸に手を当ててみる。

…ない…。

「あ、あの〜」

「やっと気づいてくれた？言っとくけど自分で取って投げてたからね。」

だからずっとこっち見ないで話してたのか。

「私寝る時はブラ取る習慣があって…」

って何言ってるんだ！？

「そんでいっつも投げてるの？」

「そんな事無いよ！」

…ホントはそうんだけどね。

「とりあえずどうにかしてくんない？俺部屋出てるから。」

「すみません。」

サトシは部屋から出てった。

なんだか謝ってばっかだなあ…ってか謝る事ばかりしてるのか。

とりあえずブラを拾う。

これ、絶対見えてたよなあ。

こういう日に限って白のピタッとしたＴシャツ…。
なんかもう全てにおいて恥ずかしい。

『ブーブー』

ケータイのバイブが机の上で鳴ってる。サトシのだ。落ちそうだったから慌てて拾った。

『あつ。』

サトシのケータイ、私とおんなじストラップが付いてる…。

「ごめんなさい、終わりました。」

扉の向こうに向けてちよつと大きな声で言った。

「これ良かったら飲んで。」

サトシは冷たい麦茶を差し出した。

受け取ってとりあえず床のクッションに座った。

「ありがとうございます。あの、ケータイ鳴ってましたよ。」

「ああ。タクヤだ。もういいや。てか今更敬語使わなくて良いから。さっきまで言葉遣い凄かったし。」

「それは酔ってたからで…じゃあそっちもアンタって呼ぶのやめてください。サキで良いから。」

「じゃあアナタってのもやめて。すっげえ冷たい感じ。」

「だって何て呼べば良いか…。」

「俺、あだ名とか無いしフツーにサトシで良いから。」

「分かった。」

またサトシのケータイが鳴る。
メールかな？

「あー、もしかして彼女いる？」

「えっ？居ないけど。居たら合コンなんて行かないし。何で？」

「そのストラップ、デイズニーのでしょ？2つで1コになるやつ。」

「ああ。でも彼女じゃないよ。」

「良かった。酔っ払ってたといえ彼女居る人の家に行くのは申し訳ないと思っで。ちなみにそれ私ともペアになるよ。」

そう言っでミニーのストラップの着いたケータイを見せた。この片割れはもちろんユータが持つてる。

いや、もう捨てたかな。

「アンタ…サキこそ彼氏居るんじゃないや…でもさっきモテないとか色々叫んでたな。」

「とっくに別れたよー。なのに忘れられない未練がましい女なんですよーだ。もしかしてサトシもそう？」

「そんなんじゃないって。てか俺彼女居た事無いし。」

サトシは超平然として言った。

「えーウソだあ。そのルックスで彼女居た事ない訳ないでしょー
しかも医学部で。」

「ホントだって。何ならシンタロウとかに聞いてみなよ。」

そこまで言うなら本当なのか…。

「その片割れの人とはどんな関係なの？」

「アンタには関係ないだろ？」

「またアンタって言った。良いじゃん。始発まであと2時間だし語るうよ。」

さっきまで無愛想って思ってたけど話してみると意外とフツ―だ。
てか他の3人とは違う話し易さがある。

「まいつか。今日居た奴らに言うなよ。」

「大丈夫。誰の連絡先も聞いてないし―。」

「そうだったな。てかそんなに面白くないよ。」

「いいから言うて―。」

「これ、妹に貰ったの。」

「は？」

「だから、妹に貰った。それだけ。」

「何それー？つまんないー。」

「言っただろ？面白くないって。」

「何で妹とハートのペアストラップ持ってたの？もしかしてシスコン！？」

「違う。妹が極度のブラコン。これ外すと怒るんだって。」

「それヤバくない？」

「俺だって嫌だったよ。しかも俺に好きなコ出来ると何でかそれ知っててそのコに嫌がらせするし。」

だから彼女いなかったんだ…。なんとなく納得。

「ってかさあ、そのストラップしてるから彼女出来ないんだって。デイズ二ーのストラップ」彼女居ます。だもん。」

「そういうもん？」

「そーいうもん。」

「じゃあそのコトバ、そっくりそのままサキに返すわ。」

「…………。」

間違いない…。

「てか妹何歳なの？」

「18歳。…生きてれば。ね。」

「えっ。」

「去年の夏、交通事故で死んだんだ。」

「そうなんだ…。ごめん…。」

「別に気にしないから。このストラップくれた1週間後だったんだ。だから形見なわけ。でもこれしてたら彼女出来ないのか。もしかしたらサキの陰謀かな？」

「サキ？」

「ああ、妹の事サキって呼んでたんだ。ホントは咲子。」

「紛らわしい名前でごめん。」

「だから気にしてないって。始めは戸惑ってアンタとか言っちゃったけど。」

「そっか。」

「じゃあ今度はそっちの話聞くよ。」

「悪いけど長くなるよ?。」

「まじで?途中で寝てたらごめん。」

そんな事言いつつサトシはずっと話を聞いてくれた。

気づいたら電車が動き出して1時間経ってた。

「つまり、何で振られたか分からんから未だにスッキリしないのか。」

「

「多分そこに行き着くと思う。男の人ってそーゆーもんなの?。」

「そんな事俺に聞いても分かるわけないじゃん。」

「そうだよな。ねえ、もしかしてチューもまだした事無いの?。」

「お前よくそんな事言えるなあ。ハイハイ、ありませんよ。」

「まじで!?ハタチでしょー?。」

「うるさい。」

「かわいそうだから付き合ってあげようか?。」

「そんなん要らねえよ。ズボラ女はイヤだし。」

「ちょっと。勝手に決めつけないでよ。」

「いやいや。行動見てれば分かるから。どーせ部屋汚いだろ？」

す、すごい…。

「今はキレイだもん！！」

「『今は』って。オレ汚いのはムリだもん。」

確かに部屋の中はかなりキレイだし物が無い。

「ちよつと！私汚くないからね。」

「分かってるって。」

「じゃあサトシはどんな女の子が好きなの？」

「んつと、明るくて、いつも笑顔で…サキみたいな子。」

「えっ？私みたいな子？」

「言い直すわ。咲子みたいな子。」

「分かってるって。てかやっぱシスコンじゃん。」

「うるさい。でもアンタ本当に咲子に似てる。」

ちよつとドキつとする。

「似てるの？」

「ああ。雰囲気こそつくり。喋り方もだし、幼稚なところとか。」

「陰ながら私の事バカにしてない？」

「よく分かったじゃん。」

「何かはじめ会った時と性格全然違うね。」

「それ言うならそっちでしょ？大人しい子だと思った。」

「人見知りなだけ。ホントは騒がしい子だよ。」

「それはもう知ってるよ（笑）」

「サトシこそ全く喋ってなかったじゃん。」

「あーいう雰囲気苦手なんだよ。しかも騙されて機嫌悪かったし。」

「私も！あの雰囲気苦手。」

「だから寝てたんだ。」

「そんなにイジメないでよ。そこ後悔してんだから。」

なんだかんだでサトシの家を出たのは午前8時くらいだった。

「駅近いねー。」

サトシが駅まで送ってくれたんだけど、3分もかからなかった。

「駅に近い物件を選んだからね。」

「この辺りで家借りると高いでしょ？」

「まあね。実家なら3LDKくらいに住める家賃だな。」

「実家田舎なんだね。」

「フツーそこ突っ込まないだろ？実際ド田舎だけど。」

「まあ良いじゃん。今日はホントーにありがとうね。」ご迷惑おかけしました。」

「ああ。とりあえずサキは外で飲まない方が良いな。」

「まだ言っの〜!？」

サトシが笑った。

「じゃあ今度メシでも行こうよ。もち酒抜きで。何食べたい？」

「ん〜焼肉!!」

「可愛げないなー。オツケー。また連絡するから。」

そう言ってわかれた。

ん？サトシにアドレス教えて無いじゃん。
てかご飯誘われたよね…。
正直嬉しい自分が居る。

電車に乗り、空いてる席に座る。

長い長い一日が終わった。

…ん？始まったのか？

とりあえず眠いや。

電車の揺れが心地良かった。

6 ケータイ

「合コンの後どうしたの？」

週が開けて月曜日。2限が終わってナチ、カヨ、アユミ、私の合コンに行った4人でお昼を食べているトコロ。

ナチがカヨに聞いている。

「ナチには言いにくいんだけど…。」

「あつ、全然気にしなくて良いよーもしかして、しんちゃんにヒドイ事された？」

「うーん…。まあそんなトコ。私的には無いなあゝって思ってた。来ちゃった。」

「ごめんね。しんちゃん女癖悪いから。」

「ううん。大丈夫だから。それよりみんなはどうだったの？」

「私はタクヤと連絡とりあってるよ。」

ナチが言う。

「良いじゃんー。アユミは？」

「そついやジュンと帰ったもんね。」

ナチが付け足す。

「何も無いよー。ナチとサキ2人とも相手出来てたからなんとなく一緒に帰っただけ。すぐ別れたし。」

「そうだったんだー。」

ジユンとアユミ、結構お似合いだと思ったのになあ。

「サキはどうだったのよー？」

アユミが聞いてきた。

う…来るとは思ってたけど、話したくない事だらけだよ…。酔っ払ったとか記憶ないとか…。

「あつ、居た。サキ。」

「えっ？」

振り返るとなんとサトシが居た。

「昼は学食に居るって言ってたから来てみたんだよ。すぐ見つかったからびっくり。」

サトシは私の知らない男友達と2人のようだ。
てか私の方がびっくりだよ。

「どうかしたの？」

「これ、ウチの玄関に落ちてたんだけどサキのじゃない？」

そう言つてサトシはアナスイのハンカチを渡してきた。

「あ、私のだ。ありがとう。」

「そんだけ。じゃ。」

『そんだけ』… かあ。

「ねえ!!」

ふと呼び止めた。

「何？」

サトシが振り返る。

「連絡先教えてよ。」

「い—よ。 090—」

「ちょっと待つて赤外線で…」

「言つとくけど俺メールキライだから。一回だけ言つから覚えろよ—。 090—」

私は慌ててケータイに打ち込んだ。

「ふう—。」

なんとか登録できた。

「…あのーサキさん？」

席に座ると3人の視線がすつごく飛んできた。

「何ナニーもしかしてサキ付き合ってたの？」

「違うつて。第一アド知らないとかあり得んでしょ？」

「でも家行つたんでしょ？」

「それは―…」

誤解を解きたいけど経緯は話したくない…。

「なんか合コンの時とイメージ全然違うね。サキ、素直に白状しなさいー！」

お昼休みの間ずっと問い詰められたけど話さなかった。

だって色々ヒミツにしたいからね。

ケー番入手出来たからかサトシが探してくれたからか、私は幸せな気持ちでいっぱいだった。

7 電話

家に帰ってからずっとケータイとにらめっこしてる。

午後11時。やっとリビングに居るのが私だけになった。

サトシに電話掛けたかったけど部屋にはお姉ちゃんが居るからリビングで掛ける事にした。

ちょっと緊張するけど早く話したい。そんな気持ちだ。

大きく深呼吸して通話ボタンを押した。

『プルルル…』

『プルルル…』

で…出ない。

一気に気が抜ける。

『♪ ♪ ♪』

着メロが鳴る。慌てて出た。

『もしもし〜サキ?』

「そうだけと違ったらどうすんの?」

サトシは私の番号を知らないはずだし…。

「サキから来ると思ってたから。待ってたし。」

『ドキ。』心臓の鼓動を感じる。

「てかあの番号の教え方は無いよー。周りに見られてたし。」

「あの時レポートやらなきゃで急いでたんだよ。まあいいじゃん。」

「メール何で嫌いなの？」

「別にキライじゃないよ。」

「えっ？メール嫌いって言ったじゃん。」

「それはサキに電話してもらいたかったから。声聞きたいじゃん。」

「ねえ…何かキャラ達くない？」

饒舌すぎる。

「あは。さっきまで飲んでたんだよー。」

「だいぶ酔ってない？」

「別にー2杯しか飲んで無いしー。」

「ちょっと、人の事言えないじゃん。」

「そんな事よりさ、いつ行く？焼肉。」

ホントに行くんだ。気持ちが高まる。

「いつでも大丈夫だけど…出来たら金曜か土曜が良いな。」

「じゃあ今週の金曜ね。一日でも早く会いたいし。次の日休みだしウチに泊まってきなよ。」

ちょっと、なんだか大胆な事言ってない…？反応に困る。

「…分かった。じゃあ金曜ね。」

「また今度詳しく決めよ。明日電話するから。」

そう言っで電話を切った。

なんか…ドキドキが止まらない。っていうか切った後の方がドキドキが早くなってる。

サトシ、本気で言ってるのかな？

それとも酔ってるから？

今の電話の事覚えてるかな？

『明日電話するから』

サトシが好きなのかまだ分からない。でも話してて楽しいのは確か。

サトシの事もっと知りたいって思った。

8 心の奥

水曜日。

なんだかんだで3日連続サトシと電話してる。

サトシとは色んな会話をする。ホントくだらない話とかも。

しかも意外と気が合う。

『きのこの山』と『たけのこの里』なら『きのこ』だね！っていうのか。

（大抵の人は『絶対たけのこだよ』って言うんだ（T-T））

「サキは明日授業あるの？」

「明日ってか毎日あるよー。明日は1限と3限だけ。」

「うわ。嫌な時間割りだな。休みだったらデートしようと思ったのにー。」

デート！？冗談混じりって分かってるけどドキッとしてしまう。

「えっ？サトシ明日休みなの？」

「そう。いいだろー。」

「良いなあー。そんなに休みあるなら医学部も4年制にすれば良い

のに。」

「いやいや、授業大変だから。」

そうなんだ…。

「明日、3時以降は？授業終わったらヒマだよ。」

「残念ながら5時からバイトー。明後日遊ぶのにそんなに俺に会いたいの？笑」

「そっちが先に『デートしよ』って言ったんでしょ！？」

「あはは。」

「サトシってさあ、付き合った事無いくせに結構口ウマイよねー。」

「ちょっと、年齢」彼女居ない歴は結構悩んでるんだからあんまり言うなって。もしかして掴まれちゃったの？オンナゴコロ。」

「残念ながらぜんぜん（笑）」

……ホントはそうかもしれません…。

「なんだあー。そうそう、明後日6時に渋谷で良い？」

「うん。分かった。じゃあまたね。」

「毎日誰と電話してんのー？」

電話を切ると同時に背後から声がした。

「お姉ちゃん！まだ起きてたの？」

「明日の授業の指導案書いてたの。アンタ、ユータくんが忘れられないとか言いつつもう彼氏出来たの？」

「そんなんじゃないって！」

「『そんなん』って事は電話の相手はオトコかぁ。ユータくんはもう吹っ切れたの？」

うつ… やっぱお姉ちゃんは痛いトコロを突いてくる。

「この人に会って、だいぶ前向きになれたけど、そんな数日じゃキモチ変わらないよ。」

心の奥にはまだユータが居る。

「ま、次に進めそうなんでしょ？焦らずに行けば気づいたらユータくんの事なんて思い出さなくなるわよ。」

「うん…。」

本当にそんな日が来るのかな？

サトシは私の事どう思ってるのかな？

私はサトシの事すっごく身近に感じてるけど、出会ってからまだ一

週間も経って無いんだ…。

この一週間でサトシに気持ちが始めてるのは確かだ。

でも、今イチバン好きな人はユータってのは変わらない…。

9 衝撃

木曜日。

1限の講義はほとんど寝てしまった。もうすぐテストだというのに…。

ナチと私は同じ専攻だから授業もほぼ一緒なんだけど、この授業だけは別。

他の友達とも違うから毎週これだけは一人で受けてる。

それもあるって木曜の授業はキライ。

ナチは3限からだから2時間目と昼休みまで1人で過ごさなきゃいけないのもその理由かも。

とりあえず図書館へ向かう事にした。テスト前だしね…。

『ブーブー。』

ケータイのバイブが鳴る。

図書館行くんだから音消さなきゃ。

ケータイを見ると着信だった。

『谷原ケンからだ。』

ケンちゃんは高校のクラスメイト。

そういえばユータと会った時、『谷原がクラス会しようって言うって』って言うってたなあ…。

「もしもし〜ケンちゃん？」

「あつ、サキ？久しぶり。」

「久しぶり〜元気？」

「ああ、俺は元気だけど…。」

「もしかしてクラス会の話？ユータからちょっと聞いたよ。」

「えっ？ユータと連絡取ってるの？」

「違うよ。先週の金曜…かな。バッテリー会っただけ。」

「そんなに驚かなくても…。」

「まあ高校3年の後半一言も話さなかったもんなあ。」

「実はさあ、そのユータが事故ったんだ。」

「えっ!？」

「全身に電流が流れる。」

「先週の土曜、チャリに乗ってたら車とぶつかったらしい。」

「ケガは？意識は？」

「意識不明だったけど、一昨日戻って今はフツーに会話してる。」

とりあえず安心した。

「それでさ、ユータがサキに会いたがってるんだ…。」

「えっ？そんな訳無いでしょ？」

「サキ、今日お見舞い来れない？高校の近くのK病院なんだけど。その時詳しく話すから。」

「じゃあ今から行く。」

「えっ？学校は？」

「どうせ空き時間だし大丈夫。1時間位で行くから。」

「分かった。じゃあ俺も向かうよ。」

電話を切ると駅に向かって走り出した。

ユータが私に会いたがってる？

そんな訳無いって思いつつも走ってるのは心配だから、早く会いたいから、まだ…好きだから…。

慌てて電車で飛び乗る。なんとか急行に乗れた。

ふとケータイを見る。

不在着信1件 松岡サトシ

ケータイをバックにしまった。

病院に着くとケンに教えられた病室へ急いで向かった。

314号室。どうやら一人部屋のようだ。
扉が開いてる。ちよつと覗いてみた。

「サキ！」

ユータだ。ケンとユータのお母さんも居る。

ユータのお母さんに頭を下げ、部屋に入った。

ユータは頭、首、腕、足、至る所包帯ぐるぐるだ。

「サキ、来るの遅いよ。彼女のくせに。」

「えっ？」

何言ってるの？事故で頭おかしくなったのかな？

「えっ？じゃないだろ。彼氏が事故ったつてのに全然来ないから谷原に連絡してもらったんだよ。俺のケータイ、事故で壊れたらしくてさあ。」

どういう事？

「サキ、ちよつと外来て。」

ケンちゃんが耳元で囁いた。

「私、ちよつとトイレ行ってくる。」

そう言つて廊下に出た。

ケンちゃんは私を休憩所に連れていき話だした。

「実は…ユータ記憶喪失になつたんだ。」

「えっ！？でもフツーに私の事も覚えてたじゃん。」

「詳しい事は分からないんだけど、事故のショックでここ2年間の記憶が全て消えちゃったらしい。」

「そんな事つてあるの…。」

驚きを隠せない。

「ああ。本人に話してもなかなか信じて貰えないらしいんだ。」

「だから私の事彼女つて言つたんだ…。」

2年前なら何の問題もなく付き合つてた頃だ。

「しかも、この2年の記憶は一生戻らないらしい。」

「……。」

言葉が出ない。

「だからユータの中では、サキは未だに彼女なんだ。とりあえず今は彼女のフリしてやってくんない？」

「…分かった。」

何だかよくわかんないけど一応答えた。

部屋に戻るとケンちゃんは帰っていった。

ユータはずっと事故の話をしてた。

（正確には目覚めてからの事だけど。）

不思議だ。ユータと普通に話をしている。
優しいユータが目の前に居る。

もしかしてあの頃に戻れるのかな…。

『ぐう』。

「あつ。」

話してる途中お腹が鳴った。慌ててお腹を押さえる。

「サキお腹空いてんの？」

「そーいえばお昼ご飯まだだったや。」

時計を見るともう1時を過ぎていた。

3 限間に合わないな…。もうこのまま家に帰る。あつ、そういやナチに連絡してない！！

「サキちゃん、おばさんと一緒にお昼食へに行かない？私もまだなのよ。」

「あつ、はい。」

おばさんは何か話したそうな感じだった。

「ユータはまだ手術後なんだからしっかり寝てなさいよ。」

「はい。サキ、今日はもう帰るの？」

「うん。また来るよ。」

「じゃあ明日な。ちゃんと来いよー。」

明日…。

返事はしなかった。

おばさんと私は病院のすぐ横にあるイタリアンのお店に入った。

「すみません。ちょっと友達にメールしても良いですか？」

「ええ。どうぞ。」

注文後、とりあえずナチにメールしようとケータイを出した。

着信4件 メール2件

着信はサトシが2回、ナチが2回。

メールを開く。両方ナチだ。

『今着いたよー。どこに居る?』

『今日サボり?とりあえず代弁しといたよ。あと、偶然サトシ君に会った。サキの事探してたよー。』

サトシ、学校休みなはずじゃ…。

『連絡遅くなってごめんね。今日サボるー。また夜電話するね。』

サトシには触れず、返信した。

「すみませんでした。」

そう言っておばさんと向かいあった。

「サキちゃん、久しぶりなのに巻き込んだじゃってごめんね。」

「そんな、気にしないでください。」

そっいえばユータのお母さんと会ったのは1年ぶりだ。

「記憶喪失のこと、ケンくん聞いた?」

「はい。」

「サキちゃんは今彼氏居るの？」

「ユータと別れてからは居ないです。」

「そう…。お願いがあるんだけど…。あの子ともう一度付き合っ
てくれないかしら。」

「えっ!？」

「体調が良くなったらちゃんと記憶喪失の事を受け止めさせるつも
りなの。」

でも、あの子本当にサキちゃんの事好きだったから、いきなり別れ
たなんてショックが大きいと思うの。別れた時もずっと部屋に閉じ
こもって泣いてたし。」

「えっ? 振ったのはユータですよ?」

何で振った方が泣くの?
意味が分からない。

「もしかして…ユータから聞いて無い?」

おばさんは驚いているようだ。私は首をかしげた。

「実はね、高校3年の一学期、ユータの成績が落ちたの。ユータの
父親は、それをサキちゃんと遊んでるせいにしたの。それで別れる
って。」

…知らなかった。

「しかもお父さんは暴力が酷くてね…。サキちゃんも知ってるでしょ？」

それは知っていた。ユータがよく悩んでいた。

「ユータが勉強しないのはお前のせいだって私の事を殴ってきて…。それでユータが…。ごめんねサキちゃん。」

おばさんの目に涙が浮かぶ。

「大丈夫です。もう良いですよ。」

そんな理由だったんだ。

ずっと知りたかった別れた理由。

「ユータね、只でさえ事故のショックがあるし、これからリハビリもしなきゃいけない。そんな時支えになってあげて欲しいの。親バカって分かってるけどお願いしたいの。」

おばさんは泣いていた。

「あの…ユータの今の彼女は…？」

駅で見た、清楚な顔を思い出す。

「ユカリちゃん、知ってるの？」

「駅で偶然会って…。」

「あの子ね、大学に入ってからユータと知り合ったの。だから今の

ユータにとっては全く知らない子で…事故に遭ってからずっと傍に居てくれたのに、目覚めた瞬間『誰?』って。『彼女じゃないの。』って言ったら『俺の彼女はサキだ。』って言ったの。昨日も来てくれたのに『誰?』しか言わなくて…。」

「そうですか…。」

注文したオムライスのランチセットが運ばれてくる。

無言の中、スプーンと皿が当たる

「カチッ」という音がやけに響いた。

何度も願ったユータとの復縁。

でも何か違う。

ユカリさんにサトシ…。

色んな事が胸に引つかる。

結局おばさんに返事しなかった。

私はどうすれば良いのだろう。

10 分かれ道

『ふう〜。』

家に帰ると同時にベッドに飛び込んだ。

ケータイを取り出す。

『Eメール一件』

ナチだ。

『授業終わったら予定無いからいつでも電話して〜』

もう3時を回っている。授業は終わってる時間だ。

メール画面を閉じて着歴を見る。

サトシからの着信は全部で3回。

何で学校に居たのかな？

バイトは5時からって言ってたな…。

でも、なんとなく電話する気にはなれない。

でも連絡しないのは人として無いよなあ…。

メールにしようと思ったけど、メルアド知らなかった…。

とりあえずナチに電話してユータの話をした。

もちろん別れた理由やおばさんにまた付き合ってやって欲しいと言われた事も。

ナチは驚いてばかりだった。

「ねえナチ。私どうするべきかなあ？」

「ごめん、私にもちよつと分かんないや。」

ナチはいつも白黒はつきりさせるのに珍しい発言だ。

「また付き合って良いのかなあ？」

「サキはやっぱ戻りたいの？」

「今日ね、昔の優しいユータだったんだ。会ったらやっぱり好きだなあって気持ちに戻ってきたの。」

「そっかあ…確かに今のユータには支えになる人が必要だしね。でもサトシ君は？明日会うんでしょ。」

「サトシとは付き合ってる訳じゃ無いし…。」

「でもどう考えても彼はサキの事好きだと思っよ？今日だって探してたし。てか連絡した？」

「実は…まだ。何か電話しにくくて。」

「だからって連絡しないのはダメだよ！」

「ナチ、この事サトシに言つべきかな？」

「それは―言うべきじゃない？ヨリ戻すなら尚更…。」

「うん…。ナチ、色々ありがとうね。」

そう言つて電話を切つた。

その日、結局サトシに電話できなかった。

10 分かれ道（後書き）

ついに10話目です！

ここまで読んでくださってありがとうございます（*＜ω＞*）

皆さんの感想が知りたいので、出来たら評価・感想をお願いします
！！

11 告白

金曜日 渋谷 5時50分。

昨日からずっと考えて決心した。
今日それをサトシに伝える。

ハチ公の壁画に寄り掛かり、流れる人々をぼーっと見つめる。

なんとなく落ち着かなくて学校サボっちゃった。土日もあるから、
ナチに4日も会わない事になってしまう。

昨日からサトシとは全く連絡を取ってない。

だからサトシは来ないかも知れない。

正直な気持ち、

『来ないで欲しい』

と願う自分と

『来て欲しい』

と願う自分が居る。

学校サボったから時間はあったけど、ユータのところへは行かなかった。

『サキ、キスして。』

昨日の病院でユータのお母さんがトイレに行っている間の会話。

『えっ！キス！？』

いきなりの発言に私は驚いた。

『ホントはいますぐ抱きしめてキスしたいけど、こんなグルグル巻き状態だからさ。』

ユータは照れ笑いしつつ言った。

『そんなの出来ないよ！』

できるわけ無いじゃん…。

『今更照れるなよー。サキに触れて『生きてる』って事実感したい。』

そう言うユータのちよつと真剣な顔を見たら抱きしめたくなった。

でも、今の私には出来ない。。。

『サキちゃんお待たせ。ご飯行きますよ。』

私的に良いタイミングでおばさんが戻ってきてくれてホッとした。

「来るの早いじゃん。」

気付くと右隣にサトシが居た。

「…来てくれなしかと思った。」

思わず言ってしまった。

「それはこっちのセリフ。外暑いしとりあえず店行こ。まあ焼肉だから店ん中も暑いだろうけど（笑）」

そう言つてサトシは歩き出した。

「ちょっと待って！」

人がたくさん居て思うように進めずサトシと離れていく。

「サキはちっちゃいから迷子になりそうだな（笑）どこでも良いから俺に捕まッてて。」

「…うん。」

サトシのＴシャツの裾を少し掴んだ。

スクランブル交差点の信号が青に変わる。

たくさんの人とすれ違い、ぶつかる度、その手の力は強くなった。

サトシは隣を歩かず私のちよつと前を歩いた。

なんか、ドキドキして話せない。

「いらつしゃいませー!!」

店に入ると威勢の良い声が聞こえてきた。

仕切られた個室つばいトコロに案内される。

「昨日、電話ごめんね。何の用だった？」

注文後聞いてみた。

「てか何回も掛けてごめん。サキサ、一昨日電話した時に2限の時間ヒマって言うてただろ？だから話相手になってやろうかなー」
と思つてさ。」

「それで学校来てくれたの!？」

「何で知つて…ああ、ナチちゃんに聞いた？」

私は頷いた。

「…ありがとう。」

サトシの優しさを感じる。

泣くのを必死にこらえた。

「ちよっ…どうしたんだよ？」

「ごめん。何でもないから。」

「よく分かんないけど元気出させて。ほら、焼肉だよ？おごってやるからたくさん食べて元気だせ。」

ホントに心配してくれているのが伝わってくる。

「ホントに？じゃあたくさん食べちゃおう。」

無理矢理笑顔を作って笑った。

「奢るって言ったら元気出たなー。もしかして作戦！？」

「えへへ。前言撤回はナシだからねー。黒毛和牛頼んじゃおっかな

ー」

「こらっ。黒毛はダメ。」

なんでだろう。サトシといると固くなった心がほどけていくような感覚になる…。

すごく落ち着く。

「あのさ…昨日何で電話しなかったか聞かないの？」

会った時からずっと聞きたかった事。

「別に気にしてないよ。…って言ったらウソだな。ちょっと傷付いたから。」

サトシは冗談っぽく笑った。

「ごめんね…。」

「別に良いって。今日会えたんだし。理由だって色々あるんだろうから無理に聞きたいとは思わないし。」

「サトシ優しいね。ありがとう。」

「まさか俺に惚れちゃった？（笑）せつかくのメシだし楽しく食べよーや。」

「うん。そだね。」

丁度良いタイミングで注文した肉とドリンク（もちろんお互いノンアルコール）が来た。

色んな話をした。

小さい頃の夢や中高の部活、友達や学校の話…。

話す程にサトシに惹かれていく自分が居る。

たわいない話ならいくらでも出来るのに、ユータの話…事故の事、

記憶喪失の事が話せない。

「やっぱどうかした？元氣無いよ？」

「うっん！そんな事無いよ。」

ぼけつとした事に気付く。

ダメだ自分。さっきからサトシに心配ばっかさせてる。

「白桃サワーです。」

威勢の良い店員がグラスを差し出した。

「えっ？お酒？」

受け取るサトシに疑問の目を向けた。

「ほら、俺が注文してた事にも気付かんくらいボケつとしてたんじやん。」

「サトシ飲むの？」

「サワーなんて酒じゃないって。これは2人で飲むの。」

そう言っつてサトシは水の入っていた空のコップにサワーを注いだ。

「はい、こっちサキのね。この前みたく酔われたら困るけど、ちょっとだけ飲めばテンション上がるっしょ？」

そう言っつて少しだけサワーの入ったグラスを渡してきた。

「これほとんど氷じゃん。」

明らかに氷の方が多い。

「サトシこそ飲んで平気なの？」

「俺そこまで酒弱くないよ。」

「うそー。火曜に電話した時2杯でベロベロだったじゃん。」

「ああ、あれは、宅飲みしてて、焼酎をマグカップにロックでたっぷり入れたのを2杯。しかも空きっ腹で一氣したから。」

「それ死ぬよ?」

「まじでちよつとヤバかったわ(笑)」

「…ねえ、その時電話で何話したか覚えてる?」

「サワーを一口飲んだ後聞いてみた。」

「もちろん。じゃなきゃ俺今ここに居ないって。」

「…じゃあ、『金曜日、泊まってきたよ。』って言ったのも覚えてる?」

「けっこつ勇気の要る質問だ…。『何勘違いしてんの?』って思われたいやだなあ…。」

「…待つて。そんな事言つてた？」

サトシの顔が少し赤くなつた気がする。

「言つてたよー。別人みたいなノリで。」

「うわ。記憶ない。ちよつとそれ忘れといて。」

やっぱ酔つた勢いつてヤツだよね…。

なんでだろ。私、ちよつとがっかりしてる…。

「…なあサキ、もうバレてると思うし言つて良い？」

「えっ？何を？」

急にサトシの雰囲気が変わる。
なんとなく分かつてしまう…。

「会つてまだ一週間しか経つて無いけど、サキの事…好きになつた。元彼の事、忘れられないのも充分分かつてる。でも、こんな短期間で人を好きになつて、しかも一緒に居たいとか支えたいって思つたのは初めてで…やべ。何言つてるか分かんないや。」

サトシがすごく一生懸命想いを伝えてくれているのが分かる。

でも…

ちゃんと伝えなきゃ…。

伝えなきゃ…。

大きく深呼吸してから口を開いた。

「…ありがとう。…でも…」

言葉が出て来ない。代わりに涙が溢れてくる。

「…でも…私…サトシ…」

言葉が途切れてしまう。あんなに決心して来たのに何で言えないの？

「サキ、もう良いよ。『でも』って言葉だけで充分分かるから。ごめん、ヘンな事言っちゃって。」

サトシ、優しくすぎるよ。そうされるから…好きになっちゃうじゃん。

「とりあえず何か頼む？デザート食べなよ。」

サトシが何事も無かったようにしたいって思ってるのが伝わってくる。

「…待つて。」

「えっ？」

待つて…。今言わなきゃこのまま終わってしまう…。やっぱり気持ちにウソつけない。

「私も…私もサトシの事…好き…になっちゃったの。でも、まだ…ちゃんと…分かんなくて…」

「……………」

サトシからの返答が無い。

おそろおそろサトシの顔を見える。

「待った！こつち見ないで。俺今ぜってー顔赤い。」

慌てて視線を下に戻した。

ちよつとだけ見えたサトシの顔が照れていたのが分かる。

「ヒドい話だけど、サトシの事もユータの事も好きな自分が居るの。勿論そんなの嫌だし、どうすればいいか分かんなくて…」

「焦らなくて良いよ。サキが…俺だけを見てくれるまで待つし、俺も頑張るから。」

そう言つてサトシは微笑んだ。

サトシはいつも私が欲しがる態度や言葉をくれる。

この人と離れたくない…。

来る前にした決心…。

ユータとまた付き合つてサトシに伝える。

その考えはサトシに会ったらいとも簡単に崩れ落ちた。

ユータと別れてから、ユータ以外の人を好きになるなんてあり得ないって自分で決めつけていた。

そしてサトシに惹かれていく気持ちを認めないでいた。

でも、その止め金を外したらサトシを好きって気持ちが溢れ出した…。

『他に好きな人が出来ないからいつまでもユータの事引きずってるんだってー。』

ナチに言われ続けた言葉。

その通りかも知れない。

でもさ…

何でこのタイミングなんだろう…。

11 告白（後書き）

テストも終わって春休みになったのでどんどんUPしていきます

12 テスト

気付いたらもう木曜日。

今週からテストが始まったからか、梅雨入り宣言が出たからか、それともケータイが鳴らないからか…とにかくすごく憂鬱。

テストつてのもあつてか、サトシとは焼肉以来全く連絡を取っていない。

多分サトシからは電話しにくいよね…。

でも、次に連絡する時は決心した時つて決めてるから、自分からはまだ電話出来ない。

テスト自体は嫌だけど、連絡出来ないとか、会えない理由になつてくれる存在が有難い。

ユータの所にはあの日の、たった一度だけしか行つて無い。

会つたらまた決心が鈍る気がして…。

日曜にケンちゃんから電話が来た。

『ユータがサキ全然来ないつて怒ってるよ』

『…ケンちゃん、私…他に気になる人が居て、その人と付き合おうか悩んでるの。』

『…そうだな、サキにも新しい生活があるもんな。』

『実はさ、ユータのお母さんに

「また付き合ってやって」って言われて返事してないの。私、また病院行くか分からないし、また付き合うのは無理って伝えて貰えな
いかなあ…。」

『…うん、分かった。』

『ユータもおばさんも辛いのに自己中でホントごめん。』

『ううん。どんな理由にせよ振ったのはユータだし、受験後にヨリ
戻さなかったのもユータだから仕方ないよ。』

『そういえば合格した後もユータは私の事をシカトしてた。
おばさんの話が本当なら受験後は付き合えたはず…。』

『でも、あの頃のユータの本当の気持ちはもう誰にも分からない。
本人でさえも…。』

「サキ、明日遊ぼうよ。」

テストが終わって駅へ向かう途中、ナチが言ってきた。

「えっ？テスト中だよ？」

雨が会話のジャマをする。大きな声で返した。

「金曜日だから大丈夫。どーせ勉強しないでしょ？」

確かに…。最近ナチと遊んで無いしなあ。

「そだね。遊んじゃお」

という訳で遊ぶ事にした。でも詳しく『どこ行くー？』とかは決めない。

私とナチはいつもその時の気分で決めるタイプなのだ。

もう金曜日。

告白されてから一週間。

ケンとの電話以来、私の気持ちは固まりつつある。

でも、一歩が踏み出せない。

13 キス

「…どーゆー事？」

金曜日のテスト後、ナチは渋谷で降りずそのまま東横に乗り換えた。てつきり地元で遊ぶのかと思ったら祐天寺で降りた。

そして改札にはしんちゃんが居る。

「よっ。サキちゃん久しぶり。」

「久しぶり…！けどどーゆー事？」

何でしんちゃん？

「今日はサトシ君家でたこパだっ。っても4人だけだけど。」

サトシんち！？

祐天寺に降りたった時から薄々感じていた予感が当たる。

「スーパーで食材と酒買ってこ。」

しんちゃんが歩き出す。

「待ってナチ！私行けないよ。」

「良いから行くよ。ウチらも居るから大丈夫だっ。」

そっという問題じゃなくて…会っ事自体が…。

ナチに引つ張られ買い物をし、サトシの家に辿り着いた。

「サトシー。入るぞー。」

しんちゃんはノックもせずドアを開け、部屋の中へ入っていった。

「シンタロウ！？何しに来たんだよ？」

部屋の奥からサトシの驚く声が聞こえてきた。

「たこ焼きしに来た」

しんちゃんが平然と答える。

「はあ？」

「ねえナチ、もしかしてサトシも知らされてない？」

「どうやらそうみたいだねー。」

そう言うナチはニヤついている。

絶対に2人で何か企んでる。

「ナチ、サキちゃんも入って来なよー。」

しんちゃんが呼ぶ。

「サキ！？」

サトシが驚いているのが分かる。

元気よく入っていくナチに続いて部屋に入った。

サトシと目が合う。

なんとなく逸らしてしまった。

「いきなり何しに来たんだよ？」

サトシがしんちゃんに問いかける。

「だからたこ焼きだつてば。たこ焼き器出してよ。材料費は俺のオ
ゴリだから気にするな」

「そういう事じゃなくて…。もういいや。ちょっと待ってて。」

サトシは降参したらしい。

「じゃあ私とサキで材料切るねー。キッチン借りるよー。」

そう言つてナチは私を引つ張つてキッチンへ連れてつた。

「サトシ君部屋キレイだねー。突撃なのにキッチンまでこんなにキレイ。」

タコを切りつつナチが言う。

私は生地を混ぜつつナチの方を見た。（野菜を切る私の手つきが怖
かったらしく、ナチに生地係を任命された。）

「部屋はキレイじゃなきゃイヤらしいよ。」

「じゃあサキと付き合いだしたら大変だね。サキは散らかすの専門だし。」

「そういう事言わないでよ！聞こえちゃうじゃん。」

ナチにはユータともう会わない事、サトシに告白されたけど、思いきりがついて無い事も話した。

「別に良いじゃん。OKするんでしょ？」

「だからまだ分かんないんだって。」

「そーゆう事言ってるチャンス逃すよー。サトシ君見てみなよ、かつこいいしすぐ女寄ってくるって。」

文句を言いつつたこ焼き器の準備をするサトシを見る。確かにかつこいいけど、

「別に顔で好きになつた訳じゃないし…。」

「ほら、『好き』って言った。自分の気持ち、認めるんじゃないの？」

ナチの言葉はいつも私のココロにグサツとくる…。

「まあ頑張つて 応援してるから。」

何をどう頑張ればこの迷いは消えるのだろうか…。

「よし、準備出来たー。」

材料を持って部屋に入った。

「こつちも準備出来たよ。よし焼くべ♪焼くべ♪」

アンティーク調で真ん中がガラスになっている机の上には、似つかないたこ焼き器と大量のお酒のビンに缶…。

「私、飲まないからね…。」

思わず宣言してしまった。

大学生ってホントたくさんお酒飲んだね…。

進学校でわりと真面目に生きてきたから、お酒への抗体が無いのかなあ…。

まあ、多分こんな事になると思い、自分用の烏龍茶をこつそり買い物カゴに忍ばせといた。

「大丈夫。サキには意地でも飲ませないから。もう面倒みたくないし。」

サトシが言う。サトシ、至ってフツーだなあ。

「えっ、サキまた酔っ払ったの？」

ナチが驚く。

「違うよ。それは合コンの時の話だって。」

「????」

ナチの頭に？マークが浮かんでる。。

そーいえば話して無いんだった！
記憶無くしてサトシンち行った事。

「大変だったんだろ？サキちゃん駅で叫んだりとか。」

しんちゃんが笑いつつ言う。

「それは言わないで…。」

あっさりとナチにばれてしまった…。またからかわれちゃうよ…。

「とりあえず乾杯しよ。」

しんちゃんの掛け声で4人だけのたこ焼きパーティーが始まった。

「ちよっ、サキ下手すぎ。」

たこ焼きを返そうとするがなかなか出来ない。

「仕方ないじゃん。初めてやってんだもん。」

「見てらんないから俺やるわ。」

そう言ってサトシは私の頑張った形跡をくるっと返した。

ちょっと悔しい。

「サキちゃん、サトシとナチにやらせとけば良いって。俺達は食べる専門でっ」

しんちゃんが言う。

「シンはやるうともしてないじゃん。」

サトシが怒る。

「俺がやるとどーせ口出しすんだろ？」

「シンは適當すぎるんだって。ホント典型的O型だよな。」

「性格に血液型は関係ないんだぞ。」

「ねえねえしんちゃん！私もO型だよ。」

「おっ、サキちゃんも？何か似てると思った。仲間じゃんっ」

「サキは会った日からO型って分かったよ。ズボラっぽいし笑」

ふとサトシン家でブラを投げてた（？）のを思い出す。

あれが第一印象だもんな…。

一体、サトシは私のどこを好きになったのだろうか…。

「ちょっと、O型」ズボラとか大雑把とか決めつけちゃいけないよ、この典型A型君！」

「やっぱサトシはA型なんだ。」

「そつ、ホント色々細かいんだよ。」

「だからこんなに部屋キレイなんだね。」

「部屋キレイとかは当たり前だつて。」

「サキー当たり前だつて。」

ナチが隣からつついてくる。

ナチは私の部屋が汚い事とか、高校時代、自分の机の上さえ片付けられなかった私を知ってる。

「サキちゃん、コイツと付き合えば掃除も洗濯も料理もしてくれるよ。付き合っちゃいなよー。」

そこは触れないで欲しいのに……。まあ酔っ払ったしんちゃんに分かる訳ないか。。。

「サトシって料理も出来るんだー。」

気にしないように話題を変える。

「俺、バイト先の居酒屋でキッチンやってるから。料理好きな方だし。」

ちょっと待つて。料理も掃除も出来て見た目もかっこいい、そして医学部に入れる頭脳。

…完璧じゃん。

でも頭良いとか全く鼻にかけたりしない。
それがまた完璧だ。

なんだかんだでタコパは楽しく進んだ。

途中、ロシアンルーレットでタバスコ大量のたこ焼きを食べちゃったの以外は…ね。

「あつ、もう8時過ぎた!」

たこ焼きの片付けを終えのんびり飲んでいるとナチが叫んだ。

「えっ? 今日何かあるの?」

「9時から映画観なきゃ! 私帰るね。今日、しんちゃんの好きなラピュタだよ。」

「まじで? 俺も帰るわ。」

「えっ? えっ? ナチ帰るの?じゃあ私も…。」

「サキはゆっくりしてきなつて。後は2人でごゆっくりどうぞ」

しんちゃんとナチは荷物をまとめ立ち上がった。

「じゃあジャマ者は消えまーす。あつ、サトシ。今日のお礼」

そう言ってしんちゃんは小さな物を投げた。

「おい、シンタロウ！要らねーよ。」

「ダメだよ、避妊はちゃんとしなきゃ。」

サトシの手にはコンドームが握られてる…。

「そうじゃなくてー！」

「サキちゃん、コイツ初 だからリードしてあげてねっじゃ。」

嵐が去って行った…。

かなーり気まずい。

沈黙が流れる…。

「ったくシンタロウってヤツは…。サキ、気にすんなよ。」

サトシはコンドームをゴミ箱に投げ入れた。

「あつ、ミスチルだ。俺好きなんだー。」

そう言って私を見ようとせずテレビに集中してる。

気持ちは決まってる。あとは勇気だけ。

勇気、出さなきゃ。

「サトシ、あのね…。」

「ん？」

ソファに座るサトシの横に座った。

サトシがやっと私を見た。

大きく深呼吸する。

「…告白の返事なんだけど…こんな私で良かったら…付き合ってください。」

「…ホントに？」

サトシが覗き込んでくる。その目をしっかり見つめ、私は頷いた。

「！？」

サトシに抱きしめられる。

「サキ…ありがとう。嬉しい。」

私もゆっくりと抱きしめた。

身体力が抜けて行く。自分の全てをサトシに託したくなる。

テレビからミスチルのバラードが聞こえてきた。

この空間、全てが心地よい…。

ふとサトシの腕の力が弱まる。

お互いに見つめ合う。

キス…。

『サキ、キスして。』

ふとユータを思い出す。

顔をそむけてしまった。

「あつ…ごめん。」

「いや、俺のがごめん。先走りすぎだわ。」

サトシは照れ笑いした。

「別にイヤな訳じゃ…」

「大丈夫。分かってるから。それより久々にサキと色々話したい。」

そう言って微笑んでくれるサトシに罪悪感を感じる。

「てかさ、シンタロウ達ラピュタ見たいとか…もうちょいマトモな

ウソつけよなー。」

いつもの会話が戻ってくる。

ホントどうでも良い話。それがイチバン楽しい。

そしてなんだかんだ言って私たちもラピュタを観た（笑）

「サキ、そろそろ帰った方が良いよ。」

「えっ？」

時計を見る。まだ10時ちよつと過ぎた位。

「まだ大丈夫だよ。ラピュタ終わったら帰るよ。」

ラピュタって何回観ても飽きないんだよね…。

「いや…俺が大丈夫じゃないから。」

「何で？明日早いのか？」

「そうじゃなくて…男はオオカミなんです。」

サトシが恥ずかしそうに言う。

「ああ…」

やっと意味が分かった…。

顔が熱くなる。

「テスト終わったらデートしよ！」

改札を通る直前にサトシが言った。

「うん！」

笑顔で返事した。

13 キス（後書き）

ここまで読んで下さって本当にありがとうございます（*＜ω＞*）
稚拙な文章なので、読んでいて気付いた点がありましたらぜひご指
摘願います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4478d/>

記憶

2010年10月20日20時09分発行